

「若尾文子から始まったプログラムピクチャ、もしくはB級映画への想い」(2)

(承前) 前号で、マキノ雅弘に関する山田宏一の評を載せましたが、氏が1971年に発表した著作の中には、このプログラムピクチャやB級映画・B級映画監督についてのコメントが実に多く登場してきます。また、当時「キネマ旬報」編集長だった白井佳夫は取材の際に、企業内のプログラムピクチャの監督たちはよく「私たちのような通俗娯楽映画監督は――」などと自ら差別して自己を卑下し、みずから二流の意識を持っていることを明かしています。しかし、増村保造は「この二流意識の底で、ここにだって映画はあるのだ。いや、これこそ映画なのだ」という自負を維持し続けた人物であったと言われます。B級映画監督の生態を山田宏一は次のように綴ります。「ほとんど批評の対象になることもなく、マスコミの華やかな脚光を浴びることもなく、会社命令で一見非自主的にお仕着せ作品を三ヶ月に一本の割合で撮り続けて、それなりに自分のものを出していく」と。「主題から撮影日数に至るまで、すべてが限定された条件の中で映画館の番組を埋めていくために次から次へと撮り続けてはならない」プログラムピクチャ監督は「B級西部劇」とか「B級ギャング映画」などといったアメリカ式呼称に倣えば、B級映画作家と言えるのです。そして、氏は「“B級”とは製作条件のことであって作品の質のことではない」と力説しますが、まさにこの言葉の重要性をしっかりと噛み締める必要があるのではないのでしょうか。また、「情念と体質で勝負するB級映画監督は主義主張や一発勝負の問題作などのために討死することなく、B級意識を絶えず持続させ、永久にA級になつてはならないというのが鉄則である」とすら思われる」とも。

氏のB級映画への熱い想いはさらに続きます。その中で「B級映画の本質とはジャンルの神話の中で躍動するディテール、すなわちルーティンのおもしろさであって、これは作家の自己主張や自我の表現ではない“芸術”の部分なのであり」という一文が出てきます。この解釈については、筆者も様々なことを含めて解明したいと考えているのですが、“ジャンルの神話”については様式美と捉えると糸口が見えてくるような気がします。つまり、B級映画の真の魅力とはお決まりのストーリーの枠組みの中で、いかに定型的なアクションや細部の描写が生き生きと表現されているかということ、ルーティンの美学にあるのではないかということです。逆説的に言え

ば、使い古された枠組みだからこそ細部が光り輝くこと、観客の視線は俳優のちょっとした身のこなし、画面の構図、光と影の捉え方といった映画の持つ純粋な細部（ディテール）に向かうことになるのです。また、「プログラムピクチャのおもしろさが、一種のマンネリズムの快楽」であるとも言います。東映の任侠映画、大映の「座頭市」シリーズ、松竹の「男はつらいよ」シリーズなどは、マンネリズムの愉しさを存分に味わうことができ、こうした作品をかけている映画館に全般的な信頼を置いて見にいくという観客層ができてくると映画界は潤うことができるのです。

映画本来の愉しさとは何かと考えれば、そこには“見世物”というものの根本的理念があるのは事実でしょう。当然、芸術性の高い作品が興行的結果に結びつかないことは多々あることであり、芸術性の欠片も感じさせない作品が興行的に成功を取めることもあります。また、現代では価値観の多様化というステレオタイプの言葉で処理したくはないものの、様々な映画作品が登場してくる時代です。もはやA級もB級もない、そういった範疇で捉えるべきでない時代が到来しているとも言えます。しかし、現在に到る日本映画界の歩みの中で、過去のB級映画の果たした役割・貢献は測り難いほどに大きなものなのです。要は観客の胸にどれだけ振動を起こすかということなのかもしれません。様々なタイプの作り手がいて、同時に様々なタイプの観客が存在し、それぞれの価値観であり主義主張でありイデオロギーであったり、それぞれの眼力で映画を見ているという現状なのでしょう。筆者がこれまで述べてきたプログラムピクチャもしくはB級映画作品の前提となっていたのは二本立て興行であり、この興行スタイルが崩れてしまえば、基本的にプログラムピクチャもしくはB級映画作品をなくなってしまうことになります。いわゆる大作主義への転換や莫大な宣伝費をかけ、小説・映画・音楽を連動させるメディアミックスにより「大作」を大ヒットさせる新しいビジネスモデルを作り上げた角川映画の出現で1980年代以降徐々に1本立てへ移行しました。そして、1990年代初頭から日本でもシネマコンプレックスが広まり、上映スケジュールが組みやすくなったことで1本立て興行が定着しました。こうした時代の流れがあった中で、やはり映画の愉しさは、かつてのプログラムピクチャ・B級映画で味わった感動なりのめり込ませてくれる一種魔法のような映画技法であったのです。「映画以外の芸術とは違って、作家として自己主張したり自己表現したりすることが、映画のおもしろさを台無しにしてしまう部分があるのではないか」と思えてならない。逆から言えば、作

家としての自己意識を埋没した次元においてのみ、自由にいきいきと発露できる人間の持ち味、あるいは映画の醍醐味みたいなものがあるのではないか、そしてそれがB級映画の魅力ではないのか」という山田宏一の言葉が今こそ響いてくるのです。（文中敬称略）

参考図書：山田宏一「日本映画について私が学んだ二、三の事柄」